

ふくいミュージアム

1995.10.1

No.28

福井県立博物館



『二十四輩順拜図会』 享和3年(1803)刊、文化6年(1809)復刻再版(P.3参照)

研究ノート

近世後期越前真宗信仰の一側面

— 吉崎をめぐる諸相 —

はじめに

近世越前の真宗信仰の一つの特徴として、真宗中興の祖蓮如に仮託された諸信仰の存在と、その社会に対する実質的影響があげられます。もちろん蓮如信仰自体は全国レベルのものです。特に越前の場合、蓮如が吉崎に滞在した数年間に周辺地域で積極的に布教活動を展開しています。しかしながらその実像が明らかではないだけに、逆に後世につくられたものも含め、様々なかたちの伝承が各地に残されているように思われます。たとえば、本来は真宗開祖親鸞の20余人の聖跡巡拝であるはずの真宗二十四輩信仰に、原則的には無関係なはずの蓮如関連の遺跡が多く含まれていたり(この代表的なものとして吉崎山と嫁威の伝承あり)、また一般に流布している主に北陸街道沿いの諸寺院を巡るものとは別の二十四輩遺跡が奥越地域に残されていたり(勝山市域での調査では明治期の標石を発見したが聞き取りの結果実際に行者や信者が参詣していたという)、多くの事実がこのことを物語っています。

これらのことから、当地域の蓮如信仰流布の母胎となった吉崎をめぐる諸問題や、当該期の蓮如信仰の実態に迫ることは、近世の越前の真宗史を考えていくうえで1つの重要な課題になると思います。しかしここでは紙幅の関係上、本格的に論を展開できませんので、『越前国諸記』^①一所収で、これまで余り注目されていない真宗西派に生じた一つの事件を検討することで、上記の問題へのアプローチの一步としたいと考えます(紙幅の関係上史料は要約程度に留めざるを得ない)。

1, 寛政五年吉崎道場蓮如御影開帳一件

詳細は省略しますが、蓮如ゆかりの地吉崎山上は、近世初頭から真宗東西両派の係争地となり、延宝5年(1677)の幕府裁許の結果、山上(御山)への寺院建立は却下され、両派とも山下に道場を建立しました(通称山下道場)。そして東派では、この道場は享保6年(1721)に、本山の門主が住職を兼帯する掛所(御坊)

となり、留守居として願慶寺が実務に当たる体制がつくられました。一方西派の方は、当初は俗人が道場主を勤める毛坊道場でしたが、元禄11年(1698)に大家勤三郎が出家し誓岸を名乗り、留守居役を仰せつけられて以降、文化11年(1814)に福井御坊の掛所になるまで、本山直末の道場として存続し、代々僧侶身分の留守居(道場主)が派遣され実務を行う体制がとられていました。

この西派のケースにみられるように、必ずしも地域に密着していない留守居が実務をとるようになった場合、しばしば現実問題として在地の信者組織(門徒中・同行中)との確執が指摘されます。吉崎西派道場でも次にみるようなかたちで、留守居と当該地域の有力な信者組織川北同行中の対立が表面化しました。

寛政5年(1793)12月、川北同行中は寛延3年(1750)に下付された蓮如の御色衣の御影を、留守居実印が勝手に希望者に開帳させ、開帳料を自分の収入にしていることの不当性を福井御坊法輪寺に訴えました。しかし留守居によるこの行為は、実は44年以前留守居松庭の時代から、当地の「仕来通ニ相成」っていました。ではこの時、川北同行中が初めて留守居の行為を訴えたのはなぜでしょうか。もちろん実印との個別の確執も予想されますが、それ以上に考えられることは川北同行中がこの開帳による「収入」=実利に着目したことです。というのも、ちょうどこの時、川北同行中は独自に吉崎の蓮如堂に詰番をし、山下道場その他の修覆のための勧進を行っていました。さらに、この年8月から近隣の加戸村にある高田派の有力寺院(連枝)本流院で、本山専修寺(伊勢一身田)の一光三尊仏の開帳があり、「近隣故吉崎江も当国同行並加州表⁶夥敷参詣」するという状況が生じていました。こうした中で、川北同行中は慣習を無視し、今後は前述した開帳料も全て自分たちの収入にして欲しいと訴えたわけです。

さてこの訴えを受けた福井御坊は、実印に対して約3分2を同行中に渡し、残りを留守居のものにできるように本山から言い渡してもらうという折衷案を提示しますが、実印は拒否、金津役所に訴え出るという強行策をとると主張しました。そこでしかたなく、福井御坊は本山の役人に対して対処策を相談しました。これを受けた本山では、実印の行為は本山にも福井御坊にも伺いをたてず「留守居坊主私ニ取

計」ったことで「至而不相済事」であると裁定しました。そして吉崎にとっていわれがある御影は福井御坊の預かりにし、御忌と報恩講の際に限って輪番が供奉し拝礼させるように申しつけ、見返りに山下道場には掛替の御影を下付しますが、その開帳料の配分は福井御坊の判断で決定する(できる)ように申しつけました。

このように、この一件は本山の裁定で留守居の敗訴で決着しましたが、ここで注目したいのは、留守居や川北同行中の行動以外に、これ以前44年余り留守居によるこうした独自の行為を全く知らなかったとは思えない本山が、下からの訴えを待って初めてそれを否定したということです。訴訟過程におけるこうした姿は、近世法一般に見られることですが、寺院組織の裁判機構(寺法)のなかにも存在したことが分かります。

さらにこの事例に見られる命令系統から次のことが分かります。つまり、たとえ道場とはいえ本山直末であった吉崎道場留守居に対して、福井御坊は直接の命令権を持っていない(取り次ぎにすぎない)こと(但し最終的には本山の承認で一定の権限を獲得している)、少なくともこの段階では、本山直末の吉崎道場修覆のための勧進を実際に行っていた川北同行中が実印を訴えるに際して、本山に直接訴えるのではなく、福井御坊に訴えたということです。なおこの問題は、2で少し考えたいと思います。

2、寛政七年吉崎道場修覆勧進一件

1でみたように、寛政5年の一件を通じて、吉崎西派道場への福井御坊の関与と、道場修覆のための勧進を通じて吉崎の運営に実質的に関わっていた川北同行中の位置づけが、本山レベルで一定程度確立する一方で、これまで「仕来」として道場の運営をリードしてきた吉崎留守居の力が、相対的に低下したわけですが、このことは約1年後におきた吉崎道場の火災とそれにとまなう実印の失脚で決定的になりました。

ちょうどこの時期は、蓮如の三百回忌を2年後に控えており、真宗では東西を問わず、一山あげての活況を呈していました。その中で、蓮如信仰の一大メッカである吉崎(道場)の再建は、実印のあとを継いだ留守居松厳はもとより、川北同行中(この場合史料的には廿五日講中で登場するが、川北同行中と蓮如の

忌日にちなんだ廿五日講中とイコールと考えられている^②。同名の組織はすでに中世段階から存在するが、組織の繋がりについては不明である)、福井御坊さらには本山にとっても最重要課題になったと考えられます。

こうした状況に乗じるかたちで、福井御坊はまず、吉崎山下道場の地面上(借地)の見善屋助右衛門の持山2カ所と海手屋舗計610歩を購入しました。さらに、実印の段階に金津役所への本堂再建許可を求めた上申文書で否定された「吉崎留守居」という肩書きを、さまざまな古証文を探し求めることで認めさせ、公権力レベルで留守居の正当性を認めさせることに成功しています。

このように福井御坊は、吉崎留守居の代替わりを利用し、主体的に吉崎の運営をリードしていきようになっていきました。また福井御坊の肝煎中や惣門徒中までもが、吉崎山下道場再建協力のお墨付きを本山から獲得しています(つまり吉崎に関与することを寺法レベルで認められた存在が拡大している)。

同時に、当初から吉崎に深く関与していた川北同行中(廿五日講中)も、この山下道場再建の勧進を通じて、より実質面での影響力をアピールするようになります。そして8月17日には、本山から松厳と相談のうえでの相対勧化の許可をとりつけています。

但し前にも述べましたが、ここで注意したい点は、中世のような本山と講中の直接的関係は希薄になり、間に福井御坊や吉崎留守居が、実質的に入っていることです。

このような姿は、近世身分制社会の特徴を表しているように思われます。つまり、かつて少し述べたように^③、特権の体系としての身分集団というものを考えた場合、寺院組織(1つの身分集団)の最末端に位置する村落の寺院・道場等と村落の門徒中とは、日常レベルではさまざまなつながりを持っていますが、軽犯罪での仕置権の主体や宗門人別帳の記載方法等、法制度レベルでは、両者の間には大きく一線が引かれると考えています(但し道場に関しては厳密ではない)。この事例でも、留守居と門徒中の間には、大きく一線が引かれると考えられます。但し、こうした社会的実態が全国一律かという、必ずしも^④ではないということは、近年の塚田孝氏の諸研究等から明らかなるところです。事実、筆者がかつて分析

した南河内地域と、(まだ少し見ただけですが)越前とでは、同じ真宗優越地域でありながら、幾分異なっているように思われます(特に道場と門徒中のありようの面で)。

このような意味で、御坊・有力な中本山クラスの寺院(御坊の後見役のような機能と、下寺の手次寺としての機能を合わせ持つ場合あり)・一地方寺院・道場主(出家者が道場主の場合と俗人が道場主の場合の両形態あり)・門徒中(本山直参の場合もある)、これらをめぐる諸問題を、少し詳細に身分制という視点から考えることは、近世という時代を寺院社会という側面から分析していくうえで重要であると思えますが、ここでは問題提起のみに留めておきます。

さてこのように、蓮如信仰の高揚とその「集金能力」に注目した川北同行中、さらにはその行動に乗じた福井御坊(さらにはその門徒中までも)の吉崎への介入が、吉崎山下道場における留守居の位置を低下させ、このことが文化11年(1814)の同道場の福井御坊掛所化の1つの要因になったと考えられます。(但しもちろん、寛政11年の蓮如御影の所有をめぐる福井御坊と川北同行中との争論と、それに対する本山の介入が直接的要因になったようであるが^⑤、その歴史的前提として小稿で扱った事件があったことは確実であろう。なおこの問題は改めて考察したい)。

むすびにかえて

小稿では、寛政5年から7年にかけて吉崎西派道場に起こった2つの事件の検討を通じて、吉崎に関与する諸集団の存在と、それらの関係性に一定の変化が生じたことを述べました。実はこの少し前の寛政1年(1789)に、吉崎には本願寺(西派)門主法如が下向しており、2でみた道場再建に際しても、そのことから「御門跡様達御聴歎ヶ敷思召候」と、門主の歎きを早急な再建必要の理由の1つにあげています。この吉崎下向は、法如が長らく希望していたものがようやく実現されたもので、信仰面のみならず経済面でも、吉崎周辺地域はもちろん、越前一国にとって大きな影響を持ったことが分かります(真宗門徒にとっては信仰の昂揚が読みとれる一方、他宗派の者にとっては経済混乱の基となったこの行動に対して批判の落書が残されている)。

このようにこの時期は、当該地域の本願寺西派(寺

院・門徒等々)にとってはさまざまなレベルで、大きな構造的変化の時期であったと思われる。

さてこの数年後、文化年間に、真宗西派には三業惑乱という一山あげての教義論争が起こります。川北同行中が、越前におけるこの論争の中心的存在であったことや、その結束の媒介の1つに寛政1年の法如の吉崎下向が考えられることなどを鑑みたとき、小稿で検討したような諸問題が、この事件に一定程度の影響を持ったことは大いに考えられます。従来この事件に関しては、主に教義史や思想史の立場から研究されていますが、筆者は今後小稿で試みたような方法論でこの問題に迫りたいと考えています。また同時に、こうした非日常的世界が、どのような日常的世界(諸関係)の中から生み出されるのかについても考えてみたいと思っています。(澤 博勝)

(註記)

- ① 同朋舎出版、1983年
- ② 『福井県史』通史編3、近世1(703頁)、福井県、1994年。
- ③ 拙稿「近世の仏教統制と「周縁社会」」(『歴史科学』135、1994年)。
- ④ 塚田孝「下層民の世界」第1節(『日本の近世』7、中央公論社、1992年)他。
- ⑤ 朝倉喜祐『蓮如、吉崎と門徒』、金津町観光協会、1989年
- ⑥ 宇佐見雅樹「三業惑乱における越前真宗西派門徒」(『県史資料』4、福井県、1994年)他。

(付記)

越前の真宗史に関する研究は、昨年11月の博物館着任後に始めたもので、まだわずかな事例しか見ていません。そうした中で、今回の小論は、私自身の研究の1つの方向性を確認するためにまとめたものです。誤りも多くあるかもしれませんが、是非ご指摘を頂くとともに、情報に関しまして、ご教示くださいますようお願い申し上げます。

表紙解説 『二十四輩順拝図会』

本書は、真宗の祖師親鸞とその高弟24人の祖跡を偲び巡拝する目的から、河内国専教寺の僧了貞によって撰述されたものです。前編・後編各5巻で構成されています。

この本の特徴として、名所図絵的要素を多分に取り入れていること、祖跡にまつわる伝承を多く採用していること、採用寺院が真宗内部の派閥の枠を越えて選ばれていることなどがあげられます。

資料紹介

武生市下ノ宮遺跡出土資料

かつて越前国府のあった武生市街から西へ約10キロメートル、丹生山地南部の小さな盆地のなかに、下ノ宮遺跡(武生市二階堂町下ノ宮地籍)(図1)があります。

昭和38年、この遺跡内の山の斜面から、須恵器(古墳時代から平安時代に使われた堅い素焼きの焼物)と銅銭が発見されました。その状況は、須恵器の短頸壺(図2)・長頸瓶(図3)・平瓶(図4)が40センチメートルほどの間隔をおいてならば、全部で22枚の銅銭が平瓶と長頸瓶の中に入っていました。また、これ以外にも土に混じって3枚の銅銭、須恵器の破片がみつかっています。

出土した須恵器は8~10世紀のもので、とくに銅銭の入っていた平瓶は10世紀ころ、長頸瓶は9世紀ころのもので推定されています。また、銅銭は奈良時代に作られた「和銅開珎」、「万年通宝」、「神功開宝」の3種類でした。

なお、現在これらの資料は、所蔵者の山下 正氏より当館が寄託を受けています。



これらの資料は出土した状況や県外での類例から、祭祀のために埋められたものと考えられています。ではその目的は何だったのでしょうか。今のところ次のようなことが想定されています。

1. 峠神への奉養

東山道・東海道などの古代道路の峠では、峠神の祭祀が行われていたことがわかっています。この下ノ



図1 遺跡の位置

宮遺跡は、現在武生市街から海岸部の米ノや糠へ抜ける道のそばに位置しており、古代の道路が通っていた可能性があります。

2. 寺社への奉養

銭などが出土した地点や、これに隣接して小規模な寺社があった可能性もあります。

3. 地鎮にとまなう埋納

建物の建築に先だって、地鎮のために銅銭を埋めた例が全国的にみられます。

4. その他の祭祀

上記の3つと重なる部分もあるかもしれませんが、五穀豊穡を祈る、あるいは氏族神・祖霊まつるという



図2 短頸壺

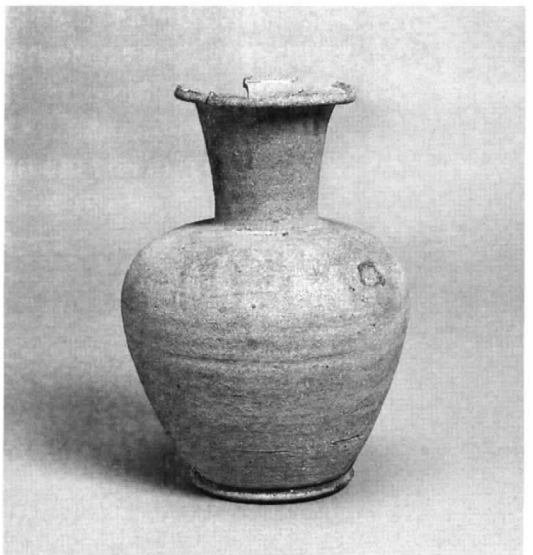


図3 長頸瓶

目的から、これらのものが埋められた可能性もあります。

下ノ宮遺跡の祭祀の目的については、今のところこれ以上確かなことはいえません。さらにこの遺跡の範囲は広く、祭祀関係の資料が出土した地点は遺跡の片隅に過ぎません。遺跡の中心部は集落なのか、寺社などがあったのか、今後発掘・分布調査が行われることによって、しだいに明らかになってくると思います。

○

さて、この遺跡出土資料についてはもう一つ問題があります。それは平瓶の裏側の、「桑田□」という墨書です(図5)。□の部分は「郷」の略字ではないかといわれています。

平安時代の百科事典といえる『和名類聚抄』によると、丹波国に桑田郡桑田郷(現在の京都府亀岡市)の名がみえますが、越前国には該当する地名がありません。では、この土器は丹波国から運ばれてきたもののでしょうか。しかし、形態や土の質を観察した結果によると、同じような資料は丹波ではみつからず、よく似たものは福井市内の遺跡でみつっています。

では、これが越前国内で作られたとすると、この墨書はどう解釈したらよいのでしょうか。ひとつは、現在文献には残っていないが、かつて桑田郷という郷が越前にあったという解釈、もうひとつは、この祭祀やそれをつかさどった人が丹波国桑田郡桑田郷に関連があったという解釈です。

しかし、これまで平城京などで出土した大量の木簡のなかには、越前国内の地名として「桑田□」は確

認できません。

また、現在の京都市東北部の課税台帳である「山城国愛宕郡計帳」によると、奈良時代前半には、多くの農民が越前国に逃亡していることがわかります。下ノ宮遺跡のはじまりもやはり奈良時代です。

さらに、この遺跡のある武生市西部の盆地では、奈良時代以降の遺跡しかまだみつかりません。このころ水田などの耕地開発が本格的に行われるようになり、この地へ新たな住民の移住があったのかもしれない。

このように考えてくると、「桑田□」の墨書は丹波国桑田郡桑田郷に関連づけて考えたほうがよいと思われる。しかし、この遺跡周辺の地域は、まだまだ遺跡の調査が進んでおらず、今後の資料収集・比較検討を通じて、この資料と遺跡の性格を明らかにしていきたいと思います。(中原義史)

[参考]久保智康「皇朝銭を埋納する祭祀の一類型—武生市二階堂町下ノ宮遺跡の検討」(『福井県立博物館紀要』第1号、1985)



図4 平瓶



図5 平瓶の墨書

夏の親子向け特別企画

恐竜王国ふくい・親子サマースクール'95 ～親子で学ぶ最新恐竜学講座～

「恐竜王国ふくい・親子サマースクール'95～親子で学ぶ最新恐竜学講座～」が、全国から 250組の親子の参加を得て、8月11・12日の日程で行われました。

サマースクールの名誉校長には東京大学名誉教授の竹内 均氏、校長には放送大学教授の濱田隆士氏、講師には国立科学博物館の富田幸光氏、恐竜マンガ家のヒサキニヒコ氏、当館主任学芸員の東 洋一があたりました。

○

サマースクール第1日目

まず福井県民会館に集合ののち、濱田校長から開校のあいさつがあり、サマースクールの3つのモットー「恐竜は地球のアイドルです。」「恐竜化石は地球の宝物です。」「恐竜化石を大切にしましょう。」を全員で宣誓しました。このあと2組にわかれて、それぞれ勝山市の恐竜化石発掘現場と福井県立博物館へ向かいました。

発掘現場では校長以下講師が待っており、濱田校長からは化石発掘時の様子が、東講師からは発掘体験時の注意と化石採集のコツが説明されました。

そのあとよいよ「発掘体験」です。崖下にある発掘現場は危険なので、対岸の岩石置場で化石を採集しました。ここの岩石は発掘現場の崖を崩したときのもので、恐竜化石がまだみつかるかも知れません。みな熱心に岩石をたたいて化石を探していました。みつかったものは濱田校長が鑑定しました。恐竜化石こそみつきりませんが、保存状態のよい植物標本や巻貝を採取できた親子もありました。

いっぽう博物館へ向かった組は、特別展「フクイリュウとその仲間たち～手取層群の恐竜～」を観覧しました。まず、入口ではフクイリュウの動作模型が出迎えてくれました。そして展示を見ていくなかで、フクイリュウを生んだ中生代の手取層群やフクイリュウ復元の過程が分かるようになっていきます。また恐竜なんでも教室には、恐竜コンピューターコーナーや恐竜復元コーナー、恐竜発掘体験コーナーなどがあり、とくに復元・発掘のコーナーは好評

でした。

○

サマースクール第2日目

今日は名誉校長以下講師の講義をききました。竹内名誉校長からは「地球の誕生」について、濱田校長からは「生命の発生と進化」について、富田講師からは「恐竜学の基礎知識」について、ヒサ講師からは「恐竜をよみがえらせる」というテーマで、東講師からは「フクイリュウとその仲間たち」について、詳しい講義がありました。

つぎは恐竜なんでも教室です。「恐竜の視力はどれくらいあったのですか。」「恐竜にオスとメスはあったのですか。」「恐竜はどんな格好で寝ていたのですか。」「恐竜は脱皮をしたのですか。」などの質問が次つぎととび出しました。なかには先生が考え込んでしまう鋭い質問もありました。

そのあとヒサ講師の恐竜画教室になりました。テキストにのっているお手本に頼らず自由な発想で描いていた子や、持ってきた恐竜図鑑を参考にして描く子とさまざまでした。

こうしてサマースクールも最後の修了式を迎えました。富田講師が恐竜クイズの答えあわせをしました。勉強のかいあって、みなほぼ満点だったようです。これでサマースクールを無事修了することができました。代表の子どもが壇上に上がり、濱田校長から修了証を受け取りました。

今回のサマースクールも参加者にたいへん好評で、昨年の参加者のように文通をしたり情報交換をしあう仲間がでてくるようにと願っています。2日という短い間でしたが、普段の生活では得られない貴重な体験をすることが出来たのではと思っています。



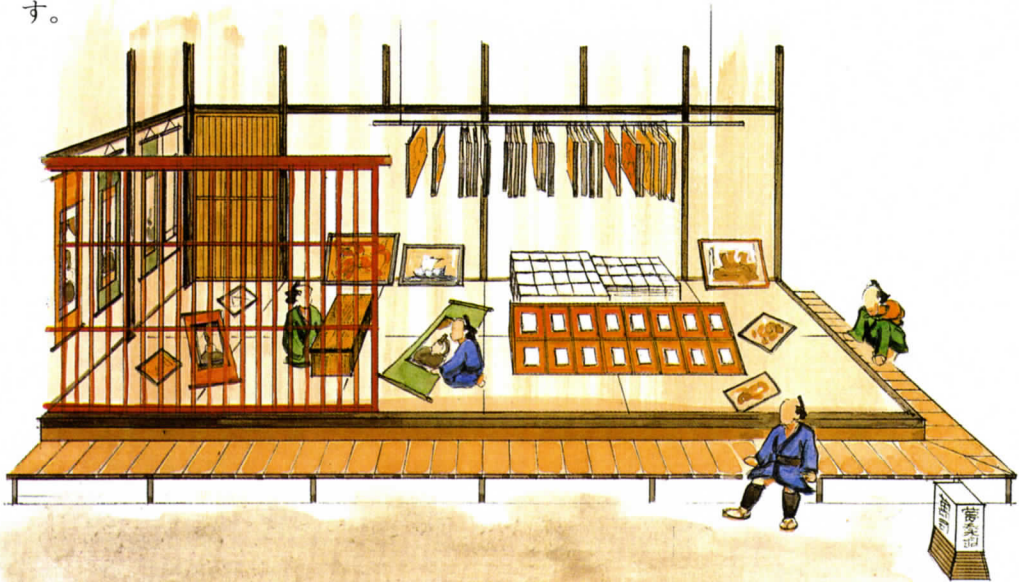
発掘体験

1996年4月、特別展開催の予定!

むらくどう・まんし
 「夢楽洞・万司の世界」
 MURAKUDOU-MANNSI
 ～江戸後期の庶民文化～

【企画の趣旨】

- 「夢楽洞」は、江戸後期から明治期にかけて、福井の町で絵馬や天神などを製作・販売した工房かつ店舗でした。歴代の絵師が「万司」の号を名乗り、「まんし」の名で庶民に親しまれました。
- 「夢楽洞」の商品は、いずれも庶民向けで、安価で手軽なものでした。絵馬は、馬図を中心に動物図や物語図などきわめて種類が豊富で、京都の本願寺詣りや伊勢参宮などの旅のみやげに愛好され、厄年払いの奉納物にも用いられました。天神画は、浮世絵風の大首絵の構図を取り入れたユニークな作品で、正月の掛け軸として人気を集めました。
- 初代絵師の「万司仙人」は、当初、雑俳(ざっばい)の師匠として活躍しはじめました。江戸時代の宝暦～天明期、庶民の娯楽・文芸の指導者的な立場を築きあげ、後の「夢楽洞」の発展の基盤をつくった人物といえます。その彼が、雑俳から絵馬の製作に活動の中心を置き換えていったのです。
- 今回の企画は、初代絵師の「万司仙人」を絵馬工房としての「夢楽洞」の活動の跡を追いつつ、江戸後期の越前を中心とする庶民文化の有り様を紹介するものです。



ふくいミュージアム
 No.28
 1995.10.1 発行

編集発行 福井県立博物館
 福井市大宮2丁目19-15
 〒910
 ☎0776-22-4675(代)
 印刷 株式会社エクシート

